

# ICEP 2025 カンボジア

インターナショナル・コミュニティ・エンゲージメント・プログラム  
International Community Engagement Program

## 活動報告書



2025年12月16日に訪問した、JHP・学校をつくる会にて

認定NPO法人ミュージック・シェアリング

〒102-0083 東京都千代田区麹町2丁目5-18 半蔵門ハウス601  
TEL:03-6256-9733 E-mail:info@musicsharing.jp  
<http://www.musicsharing.jp>

## ■ 認定NPO法人ミュージック・シェアリングとは

1992年より、成長過程にある子どもたちをはじめ、音楽に触れる機会の少ない人々に本物の音楽を届け、文化・教育・芸術の振興を目的とした活動を行っています。本物の音楽を通して豊かな心を育てるとともに、音楽家の社会貢献活動に対する理解を深める場を提供する音楽プログラムを実施しています。ミュージック・シェアリングの活動は全て、個人、法人からのご寄付・ご支援、助成金、企業協力によって成り立っています。

## ■ ICEP（インターナショナル・コミュニティ・エンゲージメント・プログラム）

五嶋みどりと、世界中からオーディションによって選ばれた若手演奏家3名がカルテットを組み、音楽を通じた教育支援と文化交流を行うプログラムです。毎年12月にはアジアの開発途上地域の学校・病院・施設などを訪れ、翌年6月には日本での「訪問プログラム」に参加、東京と大阪で「活動報告コンサート」を行います。これまでに、ベトナム（2006年）、カンボジア（2007年）、インドネシア（2008年）、モンゴル（2009年）、ラオス（2010年）、バングラデシュ（2012年）、ミャンマー（2013年）、ネパール（2016年）、インド（2017年）、ベトナム（2018年）、カンボジア（2019年）、ラオス（2023年）、ネパール（2024年）で実施しています。

### ICEP 2つの目的

#### ◆ 未知の文化体験をアジアに

訪問する地域の人々は、身近な場所でクラシック音楽の生演奏を聴く機会がほとんどありません。子どもたちをはじめ、参加する現地の人々に対しては、生のクラシック音楽に触れることで世界観が広がり、相互理解や向上心を育むことを目指しています。

#### ◆ 世界各国の若手演奏家とともに活動

五嶋みどりとカルテットを組むのは、世界からオーディションにより選ばれた若手演奏家3名。オーディションでは録音審査以外に小論文やメールインタビューの課題を設け、総合的に評価しています。若手演奏家がICEPでの経験を通じて音楽のもたらす力について見つめ直し、音楽家としてできる社会貢献活動とはどのようなことなのか、実体験を通じて認識していきます。



2006年から始まったICEPの活動はアジア9カ国にて、14回実施。2025年のカンボジア訪問は6年ぶり、3度目の訪問となる。

### 日本での活動

ICEP訪問国での活動を日本国内に発信するため、アジアでのツアーの翌年、日本でカルテットを再結成しています。演奏とともに訪問国での活動について演奏家自身が語る「ICEP活動報告コンサート」の実施に加え、国内の学校・病院・施設等を訪問する「訪問プログラム」にも参加し、子どもたちや社会的に立場の弱い人たちにも本物の音楽を届けます。



## ■ 訪問国

### カンボジア Kingdom of Cambodia

面積 18.1万平方キロメートル

人口 1,710万人

人口増加率 2.4% (1995~2000年平均, 国連人口局)

首都 プノンペン (Phnom Penh)

民族 人口の90%がカンボジア人 (クメール人) とされている。

言語 クメール語

宗教 仏教 (一部少数民族はイスラム教)

※2025年 外務省ホームページより



#### 略史

##### 1. 古代の栄光：クメール王朝 (9世紀~15世紀) カンボジアの歴史で最も輝かしい時代。

アンコール王朝：9世紀に成立し、東南アジアの大部分を支配する強大な帝国となる。

アンコール・ワット：12世紀に巨大な石造寺院アンコール・ワットが建設される。

衰退：15世紀に隣国タイ (アユタヤ王朝) の攻撃を受け、首都アンコールを放棄。その後、長い「暗黒時代」に入る。

##### 2. フランス植民地時代 (1863年~1953年) 隣国タイとベトナムからの圧力に耐えかね、フランスの保護下に入る。

保護国化：1863年にフランスの保護領となり、約90年間統治。

独立：第二次世界大戦中の日本軍進駐を経て、1953年にシアヌーク国王のもとで完全独立を果たす。

##### 3. 内戦とポル・ポト政権の悲劇 (1970年代)

独立後の平和は長く続かず、ベトナム戦争の影響で凄惨な時代へ突入。

クーデターと内戦：1970年に親米派によるクーデターが起き、内戦が勃発。

ポル・ポト政権 (1975~1979年)：極端な原始共産主義を掲げ、都市住民を農村へ強制移住させる。

通貨や教育、宗教を廃止し、知識人を含む最大200万人とも言われる人々が虐殺・餓死で命を落とした。

##### 4. 現代の復興 (1990年代~現在)

内戦の終結：1979年にベトナム軍の介入でポル・ポト政権が崩壊した後も混乱は続きましたが、1991年のパリ和平協定でようやく内戦が終結。

立憲君主制の再出発：1993年に国連カンボジア暫定機構 (UNTAC) の支援で総選挙が行われ、立憲君主制国家として現在の「カンボジア王国」が誕生。

現在の姿：悲劇を乗り越え、現在は高い経済成長率を維持する東南アジアの成長株となる。

※出典：

- ・外務省「カンボジア情勢」
- ・ワールドヴィジョン「カンボジア」など

#### 訪問地

プノンペン、シエムリアップ



## ■ ツアーメンバー



Photo: T. Greenfield-Sanders

### 五嶋みどり (ヴァイオリン) Midori

大阪生まれ。10歳で渡米。同年ニューヨーク・フィルとの協演で楽壇デビュー。以来世界の名だたる音楽家と共演を重ね、40余年を数える。20歳で非営利社会活動団体「Midori&Friends」(米国NY)と「ミュージック・シェアリング」(日本)を設立。使用楽器はガルネリ・デル・ジェス「エクス・フォーベルマン」(1734年作)。現在、ジュリアード音楽院とカーティス音楽院で教鞭をとる。

国連ピース・メッセンジャー。

<https://www.midori-violin.com/>



Photo: Lucia Alonso

### ヘリム・オ (ヴァイオリン) Haerim Oh

韓国・大田(テジョン)生まれ。4歳よりヴァイオリンを始め、ソリストとしてセントラル愛知交響楽団と共演するほか、海外オーケストラとも共演し、国際的に活躍。ラヴィニア音楽祭等、欧米の著名な音楽祭にも出演。数多くのコンクールで入賞を重ね、クイーン・エリザベス、チャイコフスキー国際コンクールにも参加。ニューイングランド音楽院でミリアム・フリード、カーティス音楽院で五嶋みどりに学び、現在はベルギーのクイーン・エリザベス音楽院(Music Chapel)のアーティスト・イン・レジデンスを務める



### アンディ・パク (ヴィオラ) Andy Park

権威あるプリムローズ国際ヴィオラ・コンクール(2024年)上位入賞。イェール大学で、化学工学とヴィオラ演奏をダブルメジャーで修得、ヴィオラをエットーレ・カウサに師事。現在、ジュリアード音楽院に在籍し、ミーシャ・アモリーに師事。アメリカ・ユース管弦楽団(NYO-USA)、ラヴィニア音楽祭に出演。ジョシュア・ベル、イエフィム・ブロンフマンら著名音楽家と共演。弓はマエストロ財団より貸与されている。

<https://andyparkmusic.com>



© Andrej Grile

### アネット・ヤコヴチッチ (チェロ) Annette Jakovcic

ラベル、P.カザルス、L.クラシック、G.メニューイン等の音楽祭に参加。ピエール・アモイヤル、パヴェル・ヴェルニコフ、ジェラルド・プーレと共演。プラウマン&フィショフの室内楽コンクール最高賞受賞。フリッツ・ライターマイヤー弦楽コンクール優勝。ニューイングランド音楽院、ザルツブルク・モーツァルテウム大学卒業。ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のアカデミープログラムに属し、ローレンス・レッサー、クレメンス・ハーゲン、ニコラ・アルトシュテットに師事。

<https://www.annettejakovcic.com/>



### マヤ・ウィリアムス (インターン・コーディネーター) Maya Williams

アメリカのシカゴ出身。5歳でピアノを、10歳でヴァイオリンを始める。フロリダ州ネーブルズ・フィルハーモニックのユース・ミュージック・プログラムのコーディネーターを務めた。今後とも若いアーティストの指導や、音楽を通じて築かれる人と地域社会との関わりに携わっていくことを希望している。

## ■ 活動概要

活動期間	2025年12月15日～12月26日
現地協働団体	18団体（19訪問プログラム）
参加者総数	約2,000名
主催	認定NPO法人ミュージック・シェアリング
助成	公益財団法人CBGMこども財団
協賛	キッコーマン株式会社、株式会社UACJ、花王株式会社、株式会社ダイナトレック、京阪ホールディングス株式会社
協力	全訪問施設関係者の方々
演奏曲	ハイドン : 弦楽四重奏曲 第53番 二長調「ひばり」Op.64, No.5, Hob.III:63 ベートーヴェン : 交響曲第5番「運命」弦楽四重奏版より抜粋 サン＝サーンス : 「動物の謝肉祭」より抜粋 ほか

## ■ スケジュール

秋から準備を重ね、ICEPカルテットは、活動開始前にプノンペンで数日間リハーサルを行いました。

日程	訪問地	訪問先
12月15日	プノンペン	Ratanak International（人道支援団体）
	プノンペン	Hagar International（自立支援団体）
12月16日	プノンペン	難民を助ける会 AAR（人道支援団体）
	プノンペン	Japan Team of Young Human Power (JHP・学校をつくる会)（教育支援団体）
12月17日	プノンペン	Secondary School of Fine Arts（芸術教育機関）
12月18日	シエムリアップ	Srolanh Project（障害児支援団体）
12月19日	シエムリアップ	Grace House（青少年支援施設）
12月20日	シエムリアップ	Helping Hands School（教育支援施設）
	シエムリアップ	Snadai Khmer（児童支援施設）
12月21日	シエムリアップ	Safe Haven（障害児支援団体）
12月22日	シエムリアップ	Anjali House（教育支援団体）
12月23日	シエムリアップ	School Supported by Hagar International（教育機関学校）
	シエムリアップ	Angkor Hospital for Children（医療機関）
12月24日	プノンペン	Daughters of Cambodia（女性支援団体）
	プノンペン	Taramana（子ども支援団体）
12月25日	プノンペン	Japan Heart Hospitals（医療機関）
	プノンペン	Helping Hand（子ども支援団体）
12月26日	プノンペン	Royal University of Fine Arts（芸術教育機関）
	プノンペン	Krousar Thmey（子ども支援団体）

## ■ 各訪問先と活動の様子

### ● 12月15日【プノンペン】

#### 1. Ratanak International (ラタナック・インターナショナル)

カンボジアで活動するキリスト教系の人道支援団体。地域社会、NGO、政府機関と連携し、人身取引や搾取の防止、社会的に弱い立場にある人々の保護、人身取引被害者の帰国支援、被害当事者の生活再建を支援。被害防止教育、個別支援（ケースマネジメント）、トラウマ・カウンセリング、社会復帰支援等を実施し、被害に遭った女性のための約18床の宿泊施設も運営。

ICEPカルテットは、隔週で実施されている定例の地域奉仕活動終了後、同団体を訪問し、約70名のスタッフおよびボランティアを対象に演奏を行った。この訪問は、被害当事者の支援に携わる人々にとって、相互のつながりを深めるとともに、活動を振り返る機会となった。



1. ラタナック・インターナショナルで演奏

#### 2. Hagar International (ハガー・インターナショナル)

アジア太平洋地域において搾取防止に取り組む非営利団体。虐待の被害当事者が尊厳と生活を回復できるよう、カウンセリング、法的支援、保護、経済的自立支援等の包括的なサポートを提供するとともに、政府と連携し、政策および制度の改善・強化を推進している。地域に根ざした予防プログラムや当事者主体の取り組みを通じて、個人が自らの権利を擁護し、他者を支える力を育てている。

ICEPカルテットは、プノンペンの本部においてスタッフを対象に演奏を行った。本訪問は、被害当事者の支援に従事するスタッフにとって、互いのつながりを感じながら心身を休め、その活動への敬意と感謝を共有する機会となった。



2. ハガー・インターナショナルにて

### ● 12月16日【プノンペン】

#### 3. Association for Aid and Relief (AAR) (難民を助ける会)

難民を助ける会（AAR）は、障がいのある子どもたちが学習上のニーズに応じたケアと支援を受けられるようにすることで、インクルーシブ教育の推進に取り組んでいる。カンボジア各地の学校と連携し、障がいのある児童・生徒に対する教育へのアクセスおよび支援体制の強化を図っている。

ICEPカルテットはこれまで、ラオス、カンボジア、ネパールにおいて、AARが支援する複数の学校を訪問してきた。活動当日は、プノンペンの北東約1時間に位置するクサク・カンダル地域の小学校を訪問し、メンバーがそれぞれ教室を回って演奏を行った。その後、近隣の中学校へ移動し、引き続き教室での演奏および生徒との交流を行った。



3. 教室にて子どもたちに自己紹介

#### 4. Japan Team of Young Human Power (JHP・学校をつくる会)

アジア各地で活動する国際団体であるJHP・学校をつくる会は、カンボジアにおいては、一般教育、芸術教育、成人識字教育に重点を置き、学校の建設・整備、生徒への支援、芸術教育の機会拡充に向けた音楽教員の育成、ならびに若年期に十分な教育機会を得られなかった成人への識字教育を実施している。

ICEPカルテットは午後、同団体の活動拠点2か所を訪問した。まず地元の学校を訪れ、教室訪問を行い、楽器紹介および演奏を通じて生徒と交流した。その後、北部の学校へ移動し、成人識字クラスが実施されている現場において、学習者およびその家族を対象に演奏を行った。



4. JHP・学校をつくる会の学校にて演奏

## ●12月17日【プノンペン】

### 5. Secondary School of Fine Arts

同校は文化芸術省の管轄下であり、伝統的なクメール芸術および現代芸術の双方に関する質の高い知識と経験を次世代へ継承することを目的としている。西洋クラシック楽器とカンボジアの伝統楽器を含む、舞台芸術・視覚芸術の指導を行っている。以前は「アンコール・ユース・オーケストラ」として運営されていたが、現在は同校に統合され、音楽を学ぶ子どもたちにより多くの機会が提供されている。

当日は、100名を超える生徒および教員が演奏会場に集まり、ICEPカルテットの演奏を鑑賞した。コンサート終了後、カルテットメンバーは参加した若いヴァイオリニストとチェリストに対し、演奏技術と音楽性の向上に重点を置いた指導を実施した。生徒は年齢および習熟度に応じてグループ分けされ、各グループが約1時間にわたり指導を受けた。なお、本訪問は、前身であるアンコール・ユース・オーケストラを含め、ICEPカルテットとして2度目の訪問となる。



5. グループに分かれ、直接指導が行われた

## ●12月18日【シムリアップ】

### 6. Srolanh Project (NPO法人スロラニプロジェクト)

同団体は、日本を拠点とするNPO法人で、シムリアップ州において障がいのある子どもたちへの教育および生活支援を行っている。栄養価の高い食事、安全な住居、継続的なケアの提供を通じて、支援を必要とする子どもたちの生活の向上を目指している。日常的なニーズへの対応に加え、家族が商店等の事業を開始するための小口融資の提供などを通じて、長期的な自立支援にも取り組んでいる。シムリアップの孤児院および市外の村落に暮らす子どもたちを対象に、医療支援や移動補助具の提供による身体的支援を行うとともに、社会的つながりや地域活動への参加を通じて、心理的な側面の支援も行っている。

ICEPカルテットは、まず、同団体の支援により、重度の障がいのある子どもたちが専門的なケアを受けているシムリアップの孤児院を訪問し、プログラムを実施。その後、近隣の村落へ移動し、外出が困難で主に自宅で生活している若者の家庭を訪問して演奏を行った。これらの家庭には、同団体のスタッフが定期的に訪問している。カルテットのメンバーは3軒の家庭において演奏を行い、若者および地域住民と音楽を共有する機会となった。



6. シムリアップ近隣の家庭を訪問

## ●12月19日【シムリアップ】

### 7. Grace House (グレース・ハウス)

同施設は、青少年の育成と教育支援を目的としたコミュニティセンターで、安全で安心して過ごせる環境のもと、放課後プログラムとして学習支援やレクリエーション活動を日常的に提供し、子どもたちの成長を支えている。性別、経済状況、宗教、障がいの有無にかかわらず、すべての若者に学びと成長の機会を提供することを目指すとともに、地域住民が、自らや次世代のより良い生活に向けて、助言や支援を受けることのできる場としての役割も担っている。

ICEPカルテットは、同施設において若者およびスタッフを対象に、4回のプログラムを実施した。各回では、障がいの有無を問わず、さまざまな年齢層の子どもたちに向けて演奏を行った。各プログラムには約50名が参加し、この日の参加者は延べ約200名にのぼった。



7. 演奏のほか質疑応答などとして交流

## ●12月20日【シェムリアップ】

### 8. Helping Hands School (ヘルピング・ハンズ・スクール)

同団体は、シェムリアップ州の農村部を拠点とする地域主導の団体であり、子どもたちへの支援を行っている。教育・栄養・スポーツ・社会的支援を組み合わせることで、貧困が子どもたちの将来を左右することのないよう取り組んでいる。その活動は、地域の主体性、倫理的実践、そして長期的な関与に基づいている。

当日は、ヘルピング・ハンズ・スクールで実施されている土曜スポーツプログラムに参加する生徒を対象に、五嶋みどりとアンディ・パクが演奏を行った。カルテットの他の2名が体調不良により参加できなかったため、プログラム内容を調整し、屋外教室においてソロおよびデュオによる演奏を実施した。プログラムは約1時間にわたり、最後は活発な質疑応答が行われた。



8. クメール語での交流

### 9. Snadai Khmer (スナダイ・クメール)

同施設はシェムリアップに所在する児童養護施設であり、約20名の子どもたちが生活している。子どもたちに対しては、身体的・心理的側面の双方から支援が行われている。また、アートクラスを通じて創作活動に取り組み、自らの感情を表現する機会が提供されている。子どもたちの作品は日本でも展示されており、同施設の活動への理解促進に寄与している。

ICEPカルテットは、同施設の子どもたちとスタッフを対象に演奏を行った。また、子どもたちを楽器の近くに招き、楽器や弓、弦に触れる、楽器の振動を感じるといった体験を通じて、楽器と親しむ機会を提供した。これにより、子どもたちは演奏者と直接的に関わり、相互理解が図られた。プログラム終了後には、カルテットメンバーと子どもたちがアメリカの手拍子遊びをするなど、音楽以外の形でも交流し、関係性を深める時間となった。



9. 楽器体験

## ●12月21日【シェムリアップ】

### 10. Safe Haven (セーフ・ヘイブン)

同団体は、障がいや健康上の課題を抱える子どもたちが、健康的な生活を送り、その可能性を最大限に発揮できるよう必要な支援につなげることを目的として活動している。シェムリアップ州において、複雑な医療的ニーズを有する子どもたちに対し、理学療法、作業療法、看護支援、栄養補助、発達支援サービス、ソーシャルワークなどを提供している。

ICEPカルテットは、シェムリアップ郊外の地区施設において、同団体の支援を受けている子どもたちとその家族を対象に演奏を行った。子どもたちは、セラピストや介助者を含む同団体のスタッフや家族に付き添われながら、プログラムを楽しんだ。



10. 家族と一緒に楽しむ子どもたち

## ●12月22日【シェムリアップ】

### 11. Anjali House (アンジャリ・ハウス)

同団体は、教育および地域社会の発展を通じて、生徒たちの自立を支援することを使命としている。いかなる子どもも物乞いや労働を強いられるべきではなく、すべての子どもには、安全で安心できる環境のもとで学び、遊び、友人関係を築き、成長する権利があるという理念に基づいて活動している。その目的は、生徒が学びを継続し、就労へと進み、将来にわたって自立した生活を送るために必要な力を身につけ、心身ともに健全で社会に適応した大人へと成長できるように支援することにある。

ICEPカルテットは、個別に各教室を訪問し、演奏を行うとともに楽器の紹介を行った。その後、全生徒が一堂に会し、カルテットの演奏を鑑賞した。



11. 運動場にて演奏

## ●12月23日【シエミアップ】

### 12. School Supported by Hagar International

プノンペンに本部を置くハガー・インターナショナルは、人身取引防止プログラムの一環として、カンボジア全土の学校を支援している。教育が人々の将来を切り開く力になるとの考えのもと、特に農村部や資源の限られた地域において、学校が質の高い教育を提供できるよう支援している。

学校訪問は、各教室への訪問から始まり、ICEPカルテットはクラスごとに分かれて楽器の紹介とソロ演奏を行った。その後、生徒と教職員が校庭に集まり、カルテットによる演奏を通じて、楽器が織りなす響きを体験した。



12. 演奏に聴き入る子どもたち

### 13. Angkor Hospital for Children (アンコール小児病院)

アンコール小児病院は、経済状況にかかわらず、すべての子どもが医療を受けられるべきであるとの理念のもと運営されている。同病院では、カンボジア国内の他の医療機関では対応が困難なさまざまな疾患の治療を行っている。19の病棟を擁し、1日あたり約300人の小児患者を受け入れている。

訪問に際し、ICEPカルテットは複数の病棟を巡り、患者のベッドサイドでソロ演奏を行い、子どもたちとその家族に音楽に触れる機会を提供した。また、入院を待つ家族が集まる待合室においても演奏を行った。なお、本訪問はICEPカルテットにとって同病院への3回目の訪問となる。



13. ベッドサイドでソロ演奏

## ●12月24日【プノンペン】

### 14. Daughters of Cambodia (ドーターズ・オブ・カンボジア)

同団体は、性産業に従事せざるを得ない状況にある人々がそこから離れ、尊厳を取り戻し、自立した新たな生活を築くことを支援している。歓楽街でのアウトリーチ活動を通じて対象者に働きかけるとともに、業界からの離脱を希望する女性に対し、身体的・経済的・心理的な支援を提供している。また、手工芸の技術習得の機会を提供することで、収入の確保と自立の促進を図っている。

ICEPカルテットは、同団体のビジターセンターを訪問し、当事者によって制作された手工芸品を見て回り、女性たちが職業技能を学ぶ工房を視察した。その後、リハビリセンターへ移動し、利用者が集まる中で演奏を行った。



14. 利用者の前で演奏

### 15. Taramana (タラマナ)

主にフランスからの支援を受けて運営されている同団体は、子どもたちの教育を支援し、将来の職業への第一歩を踏み出せるよう後押しすることを使命としている。学びと人間的成長を促す多様なプログラムや学習環境を整え、若者が将来に向けて自らの道を切り開く力を育てている。

ICEPカルテットは、タラマナ・センターの生徒およびスタッフを対象に演奏を行い、同団体の教育活動に寄り添うかたちで、音楽を通じた体験の機会を提供した。



15. タラマナの生徒たちに、楽器紹介をするICEPカルテット

## ●12月25日【プノンペン】

### 16. Japan Heart Hospitals（ジャパンハート・ホスピタル）

ジャパンハートは2004年に設立された日本のNPO法人であり、医療へのアクセスが困難な地域に対し、質の高い医療を提供することを目的としている。カンボジアでは、病院の運営や移動診療の実施、子どもへの無償医療（小児がん治療を含む）の提供に加え、将来にわたり持続可能な医療体制を構築するため、現地医療従事者の育成にも取り組んでいる。また、地域の医療体制の強化に向け、アウトリーチ活動、妊産婦ケア、奨学金プログラムなども実施している。認定NPO法人ミュージック・シェアリングはICEPを通じて、カンボジア、ネパール、ラオスなど複数の国においてジャパンハートと連携し、医療現場や地域プログラムに音楽を届けてきた。

今回の訪問では、ICEPカルテットがジャパンハートの支援する2か所の病院で演奏を行った。最初の公演は、プノンペン北部の農村地域に所在する病院で行われ、患者たちは病床が並ぶ一室に集まって演奏を聴いた。続いて、プノンペン近郊に新設されたジャパンハートの病院へ移動し、子どもたちとその家族、病院スタッフがプレイルームに集まり、2回目の演奏が行われた。この公演には、同団体の創設者である吉岡秀人医師も出席した。

### 17. Helping Hand（ヘルピング・ハンド）

同団体は、プノンペンのスラムに暮らす子どもたちに奨学金を提供し、高等教育への進学機会を通じて、本人および家族のより良い将来の実現を後押しするとともに、長期的な個人の成長と地域社会の発展に寄与している。ICEPカルテットによる同団体への訪問は今回で3回目となり、現在の体制となつてからは2回目、初回のカンボジア訪問時には前身団体を訪問している。

ICEPカルテットは、生徒およびスタッフを対象に演奏を行い、演奏の合間には楽器に触れる機会も設け、生徒と演奏者との近い距離での交流を深めた。演奏後には、生徒たちによるカンボジアの伝統舞踊が披露された。続いて、団体代表のチャンティ・チェンの案内により、生徒たちが暮らす地域を見学した。同氏自身もスラム出身であり、教育によって自らの道を切り開き、現在の活動に至っている。また、五嶋みどりが前回訪問時の写真を共有すると、当時その写真に写っていた子どもたちが成長した姿でその場に現れ、再会が実現したほか、ICEPの再訪を知った卒業生も戻ってきて参加するなど、訪問は特別な再会と交流の時間となった。

## ●12月26日【プノンペン】

### 18. Royal University of Fine Arts（王立芸術大学）

プノンペンにある王立芸術大学は、芸術と文化に特化したカンボジア唯一の高等教育機関である。同大学では、考古学、建築学、工学、音楽、美術、経済学など多様な分野の教育プログラムが提供されており、芸術・文化・伝統に関する研究を行う文化・科学研究センターも併設されている。音楽学部においては、カンボジアの伝統音楽と西洋クラシック音楽の双方について専門的な教育が行われている。

ICEPカルテットは、同大学の学生と教員を対象に演奏を行った。演奏後には、大学の伝統音楽アンサンブルが複数の楽曲を披露し、続いて弦楽を専攻する学生たちがカルテットとともにヴィヴァルディ《四季》の合奏に参加した。最後に、少人数のグループに分かれてのセッションが行われ、学生たちは個別指導や実技体験を通じて、楽器演奏への理解を一層深める機会を得た。なお、ICEPカルテットによる同大学（芸術学部）への訪問は3回目となる。

### 19. Krousar Thmey（クルーサー・トメイ）

同団体は、子どもたちが自立した責任ある大人へと成長することを支援する青少年育成団体である。活動は、児童福祉、教育、学習指導、保健衛生、芸術活動の5分野を柱として展開されている。児童福祉の取り組みの一環として、一時保護施設、長期滞在型施設、ファミリーホームなど、複数の児童保護施設を運営している。ICEPカルテットによる同団体への訪問は今回で2回目となる。以前は視覚障がいと聴覚障がいのある子どもたちへの支援を中心としていたが、現在では活動の範囲を広げている。

ICEPカルテットは、同団体が運営する児童施設の一つで演奏を行った。訪問中、子どもたちは演奏者と近い距離で関わりながら音楽を体感し、文化的な交流を深める機会となった。



16. プレイルームにて演奏



17. 楽器に直接触れて振動を体感する



18. 同大学の学生と共演



19. 元気な子どもたちと演奏後に記念撮影

## ●参加メンバーのコメント

### マヤ・ウィリアムス（インターン・コーディネーター）

カンボジア到着時は、かなり慌ただしい状況で、長時間の移動を経て深夜に到着し、翌朝は6時から始動するという日程でした。これから始まる9日間の活動に向けて、移動や連絡体制への不安もあり、緊張していました。これまでオンラインやメッセージでしかやり取りのなかった人々とともに活動するにあたり、自分の準備と相手を信じて臨むほかありませんでした。

滞在中は毎日、学校や児童施設、病院など、さまざまな現場で多くの団体の方々を迎えていただきました。多様な背景を持つ人々が、好奇心に満ちた表情で私たちの訪問とプログラムを心待ちにしてくれていました。なかでも印象的だったのは、初めて弓で奏でられた音を聴いたときや、楽器の振動に触れたときの子どもたちの表情です。音楽という新しい体験に向き合う彼らの驚き、喜びに満ちたまなざしは、何度見ても新鮮で、深い感動を覚えました。音楽を通じて多くの人々と深くつながる機会を得られたことは、大きな喜びでした。

また私自身も、想像していなかったほど多くの経験を重ねることができました。カンボジアに滞在し、異なる文化や言語、生活様式、人々に触れたことは、私に新たな気づきをもたらしました。訪れる先々で温かいもてなしを受け、通常の観光では足を運ぶことのない場所——農村の家庭や地域の集会所など——にも訪れる機会に恵まれました。観光の枠を越えてこの国に関わる中で、自分自身の見方や考え方が広がり、変化していくのを実感しました。

### ヘリム・オ（ヴァイオリン）

ミュージック・シェアリングのICEPカンボジアへの参加は、私の人生を大きく変える経験となりました。思い出に残らない日は一日としてありませんでした。この2週間にわたる経験を通じて、音楽が自分の人生においていかに大切な存在となっているか、そして音楽を分かち合ううえで本当に大切なものは何かを改めて実感しました。このプログラムの一員として参加できたことは大きな喜びであり、光栄でもありました。これまでで最も温かな12月を、最も心温かな音楽家たちとともに過ごすことができました。ともに時間を過ごしたすべての方々、特に、みどりさんにはその導きと献身的サポートに心より感謝しています。

### アネット・ヤコヴツッチ（チェロ）

カンボジアに到着する前、私はクメール・ルージュによる悲劇的な歴史と、その後続く世代を超えた複雑な心の傷についての説明を受けました。そのような過酷な過去を抱える人々が私たちをどのように受け入れてくれるのか、また、そのような背景の中で自分たちの音楽がどのように響くのか、想像するのは容易ではありませんでした。しかし実際には、聴衆は驚くほど温かく、好奇心にあふれ、私たちを歓迎してくれました。そのような歴史を背負いながらも、前向きに生きる人々の姿に触れ、深い敬意とともに自らの未熟さを思い知らされる思いがしました。とりわけ印象に残っているのは、シムリアップの近隣の村々で暮らす家庭を訪問し演奏したときのことです。高床式の家の外で、私は木の切り株に腰掛けてチェロを弾き、家族の方々はその上に乗って耳を傾けてくれました。楽器について簡単に紹介した後、私たちはそれぞれバッハの無伴奏の曲を演奏しました。一音一音が真摯に受け止められていることを、強く感じました。技術的な完成度を追求するあまり、演奏家はしばしば評価への不安にとらわれがちです。しかしこの経験を通じて、演奏の本質とは物語を伝えることであり、音楽を分かち合う喜びにあるのだと改めて気づかされました。



スナダイ・クメールにて、子どもたちと手拍子遊びをするマヤ・ウィリアムズ



王立芸術大学で個別指導するヘリム・オ



病院の待合室で熱心にチェロの演奏に耳を傾ける男の子

## ●五嶋みどり理事長から

プノンペンの新しく近代的な空港から飛び立つ飛行機の中で、さまざまな思いがこみ上げてきました。カンボジアを訪れたのは今回で3回目でした。最初は2007年、次いでパンデミック直前の2019年、そして2025年12月に再びこの地を訪れ、大きな変化と変わらぬ姿の両方を感じる滞在となりました。

2007年に訪れた団体を再び訪問できたことは、感慨深い出来事でした。ICEP開始間もない2年目の訪問だった当時、目の当たりにした生活環境には強い衝撃を受けました。ごみの山の強烈な臭いは、今も記憶に残っています。2019年には、Helping Handを訪問し、スラムで育ったすばらしい女性チャティ・チェンと、彼女の生徒たちに出会いました。

当時出会った子どもたちは、いまや家庭を持つ社会人へと成長しています。私の再訪を知り、足を運んでくれた人もいました。置かれた環境にとらわれることなく歩を進めながらも、なお私のことを覚えていてくれたことに、深い感慨を覚えました。

プノンペンの街も著しい変貌を遂げていました。かつては静かで閑散としていた街は、いまや交通量が増え、高層ビルが立ち並び、インターネット環境も整い、活気あるカフェやレストランが軒を連ねています。発展は街の髓所で感じられます。

それでもなお、変わらない現実もあります。人身取引から救出された女性たちや、貧困や恐怖の中に取り残された人々など、支援を必要とする人たちは、今も存在しています。確かな前進がある一方で、いまだ癒えない傷も残されています。

今回の訪問でとりわけ印象深かったのは、NPOスロラニユを通じて障がいのある子どもたちの支援に取り組む近藤さんの活動に触れたことです。彼が語る文化的・経済的な背景は理解できるものの、重い障がいを持つ子どもたちの姿をほとんど見かけない理由を知ると、やはり胸が痛みます。

彼に同行して家庭訪問に参加した経験は、深く心に残るものでした。静かに寄り添い、相手を尊重するその姿勢は、善意が必ずしも目立つ形で示される必要はないということを教えてくれます。こうした日々の取り組みは目立つものではありませんが、一人ひとりの子どもと家族の生きる世界を、静かに変えていく力を持っています。

カンボジアを離れるにあたり、私は感謝とともに、胸の奥に残る痛みのような思いも抱いています。目にした人々の強さ、再び出会えた若者たち、そして共に旅をした若い音楽家たちとの時間——そのすべてが深く心に刻まれています。

街は変わり、人は成長し、社会は前に進み続けます。それでもなお、変わらずに最も大きな力を持ち続けるもの——それは、人と人とのつながりです。



ハガー・インターナショナルが支援する学校の教室訪問

---

認定NPO法人

## ミュージック・シェアリング

〒102-0083 東京都千代田区麹町2丁目5-18 半蔵門ハウス601  
TEL:03-6256-9733 E-mail:info@musicsharing.jp  
<http://www.musicsharing.jp>